

## 資料版『奉天古陶磁圖經』解説

### 1. 「図経品」掲載の陶磁書と所蔵者別の分類

本書は、吉藺周蔵が大正9（1920）年夏に奉天で作成した『奉天古陶磁圖經』（以下「図経」と略称する）を、原本通りに原寸大で複製したものである。「図経」成立の経緯と作成者吉藺周蔵の背景、及び対象とした「奉天古陶磁」の由来に関しては、本書と一体を成す拙著『奉天古陶磁圖經』による乾隆帝奉天宝物の研究』（以下【拙著】という）に詳述したので、それを熟読して頂きたい。

拙著と共に、本書の究極の目的が中華陶磁史の正常な発展にあることは謂うまでもないが、具体的には「図経」の内容を明らかにして、「奉天古陶磁」の実像を世界の陶磁研究者に知らせ、幾多の謎に覆われた中華陶磁史の研究を促進することにある。本書が敢えて原寸大にした理由は、拙著を觀れば容易にご理解頂ける筈である。

本書のために複製した現存3冊の「図経」（「狭義の図経」）には、公刊陶磁書に記載されるいわゆる「公開品」が126件見つかっており、これは「狭義の図経品」243点の51.9%に当たる。逸失した「図経」の分を含めた「広義の図経品」は、総数で※422点ほどあったと推定される、ゆえに「逸失図経」分は推定で※179点となるが、その幾つかが現状の公開品の中に潜在していて当然である。これを推定すれば93点となり（179×0.519≒93）、これを現に確認された126点に加えれば、実に219点の「広義の図経品」が世界の公開品中に存在していると推定される。

注・①「公開品」とは美術界の慣用語で、美術館・展覧会場等において長年公開展示されて刊行の図録にも掲載され、社会に広く知られ、

その真價等に大方の専門家が疑念を公表していないもの（暗黙に真品性を認めたもの）のことである。

②※179点になるのは、「狭義の図経」の記載総数は241品目であるが、うち2品目を実質的に各2点と視ることにしたので総数が※243点となり、これに合わせて「逸失図経」分も2点増やして179点とした。

「図経品」と確認された126点が、いずれも世界の博物館・美術館・美術館が誇る重要品であることは、下記に見る通りで既刊の陶磁書が明示するところであるが、中でも平凡社刊・佐藤雅彦著『中国陶磁史』（以下では「佐藤本」と略称）は、そのうち118点を収めているから、同書を読まれた古陶磁愛好家なら、「ああ、これだったのか!」と納得されるであろう。

「佐藤本」は既に絶版のため、拙著では読者の便宜のために止むを得ず引用させて頂いたが、今なら古書店で原本を求めることも不可能ではないから、研究家には是非原本を確保の上でご参照ありたいと思う。

尤も、公開品の中には、古来の伝世説や学術的発掘説を唱えるものもあり、来歴上「図経」の記載と相容れないものが少なくない。この問題をいわゆる「他人の空似」として見過ごせば、物事は丸く収まるかも知れないが、ことは中華陶磁史という歴史学の一分野に関わる学術的問題であ

計 17点

出光美術館 (以下は、品番・「佐藤本」・品名の表示を省略)

- 49 白磁劃花牡丹文平鉢 南方窯 北宋
- 50 紫紅釉花盆 鈞窯 北宋
- 51 紫紅釉花盆 鈞窯 北宋
- 84 (154と酷似) ※215 青花羯磨文鉢 元
- 96 三彩花卉文瓶 磁州窯 金
- 110 青白磁渦文梅瓶 元
- 146 小学館・遼金元54・55青花明妃出塞図壺 元 景德鎮窯
- 168 平凡社大系37色25 青白磁獅子水注 一一世紀
- 182 釉裏紅芭蕉図水注 明洪武
- 196 出光・色192 赤絵魚藻文壺 明嘉靖

注・品番84は品番154と酷似するが、一応別物と考えた。

計 10点

デヴィッド・コレクション (PDF)

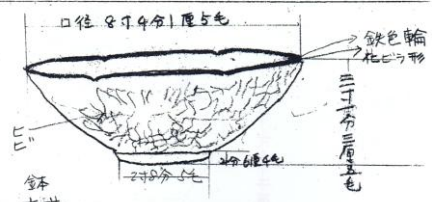
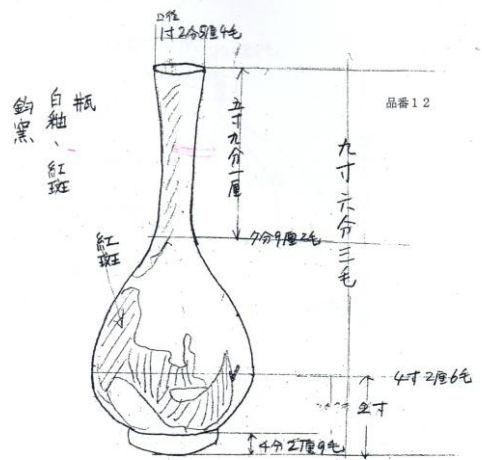
- 12 (186と酷似) ※色14月白釉紅斑文瓶 鈞窯 北宋
- 16 色13 青磁三足香炉 汝官窯 北宋
- 39 白磁劃花蓮唐草文長頸瓶 定窯 北宋
- 152 青花龍水図象耳大瓶一对 元 (1351)

注・品番12と品番186は酷似するが、同一品か否か不明

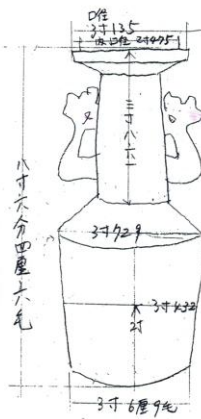
計 4点

大和文華館

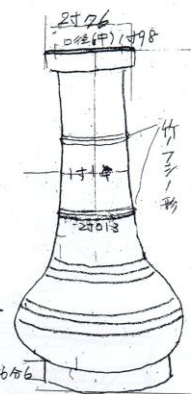
- 6 青磁鉄斑天鷄壺 越州窯 東晋
- 40 黒釉金彩碗 定窯 北宋
- 105 白地搔落し牡丹唐草文瓶 磁州窯 北宋



(I-P23)



瓶  
青磁  
鳳凰耳付  
龍泉窯  
南宋  
カレハ他 散点ハアルカ  
耳カトクアリニテ形ノアルレハ  
2点タリ



瓶  
青磁  
竹ノ模樣  
龍泉窯  
南宋  
カレハ 4.5点ハアラフ。

品番71.72 (I-P73)